科学新聞 2018年11月9日版

小中学生が論理的思考養う

慶應義塾大学は10月28日、「KEIO WIZARD・ジュニアドクター育成塾」第１回を殿町タウンキャンパス（神奈川県川崎市）で開催した。科学技術振興機構（ＪＳＴ）が支援する次世代人材育成プログラムだ。

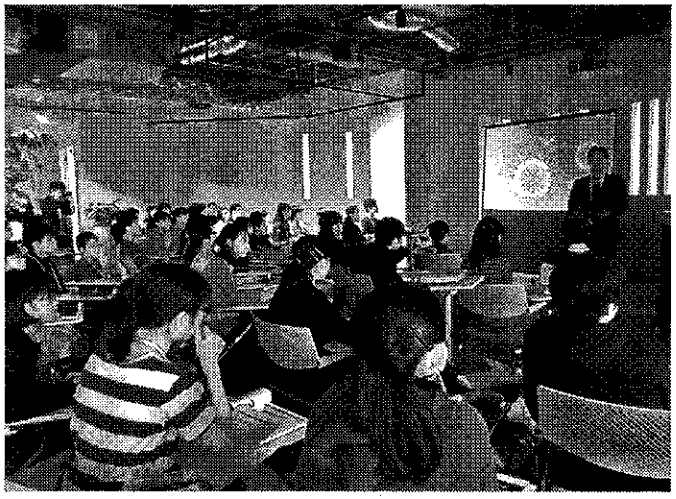
慶大が第１回育成塾

半年間に全６回の講義・ワークショップ（宇宙、ＡＩ、医療、心など）が設定されており、様々な課題を科学的な手法で考え、論理的思考や課題解決力などを育てる教育プログラム。今回は、東京や神奈川の小学５年生から中学３年生の51人（そのうち30人が女子児童・生徒）が参加した。

開催場所は、同大学が中核機関のリサーチコンプレックス（ウェルビーイングリサーチチャンパス）の拠点となっており、今回の試みもその一環だ。講師には、同拠点に参加する東京大学などからも最前線で活躍する研究者を迎えている。また、ワークショップのためのグループ（毎回メンバーは変わる）には、数人のメンター（同大学の学生や企業からのボランティア）が付き、参加者の理解を助ける。

今回は、慶應大大学院システムデザイン・マネジメント研究科の神武直彦教授が「宇宙」をテーマに、宇宙における地球の存在についての解説や、講師自身も開発に関わっていた宇宙開発を取り巻くシステム（国際宇宙ステーション、きぼう日本実験棟、ロケット、スペースシャトルなど）について講演した。参加者に問いかけながら進む講義で、みな、講師から投げかけられた疑問について必死に考え、積極的に答えていた。人工衛星が地球を回る原理について、小学生にはちょっと難しい話になると隣にいる上級生の参加者が小さな声で解説している様子もみられた。

私たちの生活を支えている人工衛星、例えば気象衛星（ひまわり）や通信衛星、測位衛星（ＧＰＳ、みちびき）などを紹介。これから人工衛星は一家に一台の世界になるかもしれないとし、その延長として、ドローン社会共創コンソーシアムの副代表を務める同大学の南政樹・政策メディア特任助教が、ドローンを使った新たなサービスの可能性について語った。ＡＩを搭載したドローンを自在に動かすデモンストレーションを行い、会場から歓声が上がっていた。神武教授は最後に「どうやるかよりも『なにをしたいか』が大事です」と参加者にメッセージを送った。



講演をきく参加者

ワークショップ中の参加者とメンター

テーマ 座学は宇宙、野外は発見

野外で行われた「発見」をテーマにしたワークショップでは、グループに分かれ、自分ではない存在（外国から初めてこのエリアに来る人、江戸時代から来た人、猫などの動物）になりきり、新たな視点での感想を各自持ち寄って、グループごとに新聞にまとめた。外国語の案内表示が少ないとか、緑が多いエリアでは動物が暮らしやすそうなどの意見が反映されていた。